チェルノブイリに健やかな日々を

倉敷での　ジェーニャ、ユーリャ、オクサナ

室賀　昭子

被曝から六年半

いつの世にも、子ども達は希望であり、未来である。その子ども達の体がじわじわと蝕まれている。このままでは子ども達が滅んでしまう……。そんな恐ろしい不安を抱きながら、子ども達を見守っている親達がいる。

旧ソ連のチェルノブイリを中心とする地域、現在のウクライナとベラルーシ（白ロシア）共和国の人々である。

悲しみは一九八六年四月二十六日、チェルノブイリ原発四号炉の事故で、多量の放射能が放出されたことに始まる。

それから六年半が経つ。被曝中心地は今、遮断機が下ろされて廃墟の町となっている。人も小動物も何もいない。埋め立てられて、電柱だけが点々と残っているような町もあるという。被災した人々は、周辺の町やキエフなどに避難している。しかし、周辺の町にも、日本の二十倍、三十倍という値で、大気の放射能汚染が広がっている。そして、その土地で育てた野菜や穀類を食べるこ

とによる「内部被曝」が重なり、甲状腺障害や白血病・癌などにかかる人々、とくに子ども達の発病が、事故前の十倍近くだそうである。事態は深刻だ。

その上、その後のソ連邦の解体による経済の混乱が続いている。医薬品や医療機器どころか、病室のカーテンや石けん、注射針にも事欠く実状が伝えられてくる。汚染された食品でさえ、十分には手にはいらないのだ。

今、日本にもチェルノブイリ救援の輪が広がっている。「広島の被爆者はチェルノブイリの被曝者に対して同じ痛みを感じないのか」という甲斐等さんの呼びかけから生まれた「ジュノーの会」は、その先駆けであったと言える。かつて被爆直後の広島に救いをもたらしたジュノー博士の名にちなんで名付けられたこの会は、市民の一日百円カンパを基金に、「ヒロシマの医師をチェルノブイリへ・チェルノブイリの子どもたちをヒロシマへ」運動を精力的に展開している。

仙台の友人を通じて「ジュノーの会」を知った私は、広島県府中市をたずねてメンバーの方々とお会いする機会ももった。そして昨年の四月、第二段として招かれた四人の医師と五人の子ども達の十九日間の日本滞在のうち、子ども達の四日間のホームステイを、岡山の友人と共にお引き受けすることになった。

数百万人とも言われるチェルノブイリ禍の人々のうちの、数人の子ども達との三、四日の交流は、とても救援と言えるものではない。しかし、「きれいな空気の中でのびのびと息をさせたい」、それだけでもいいと、はるかに遠い日本に、疲れやすいわが子を送り出そうとするお母さん達——。その気持ちを考えると、同じ年ごろの子を持つ同じ母親として、その子達をわが子のように家に迎え入れてあげたいと、ごく自然にそう思われる。ことばは分からないけれど、家は狭いけれど、子どもの母親代わりなら、きっと何とかなるだろう……。

子ども達は、ボロージャ(十五歳)、オクサナ(十四歳)、ユーリャ(十四歳)、ジェーニャ(十一歳)、バーリャ(八歳)の五人。旅行のできる、比較的元気な子ども達だ。ところが、やはり免疫の低下もあったであろうか。一番

大きいボロージャと一番小さいバーリャが、広島で麻疹（はしか）にかかってしまい、倉敷への到着が一日おくれ、二人を除いた三人の三日間の滞在となった。

通訳はターニャさん。筑波大学でシャーマンやシャーマニズムの研究をしている、ウクライナの二十六歳の女性である。もうひとりは秋山さん。東京外語大ロシヤ語科四年の学生さんで、旧ソ連を巡る四十日間の旅行から三日前に帰り着いたばかりであった。

以下は、子ども達との三日間の記録である。

倉敷であったこと

四月十四日　（火）

〈はしかにかかっていない子だけでも倉敷に〉との思いはふくらむ。

何回かの電話連絡の後、ユーリャとオクサナの二人が来られそうである。昼、再び電話あり。「ジェーニャも行けるようになった。ターニャさんと、もう病院より広島駅へ向かった」という。三人の健康を気遣いつつも私達もほっと一安心。念のため、ガンマグロブリンを持参するから、朝晩検温し、三十七度以上の時は広島の医師に電話連絡の上、それを持って、倉敷中央病院に直行すること、というのであった。

十七時十二分、改札口にターニャさん、続いてオクサナ、ユーリャ、ジェーニャ――、もうすっかり名前も馴染んでいる三人が歩いて来る。やっと、の思いである。

写真で顔も知っている。私がひとりひとり名を言うと、疲れた顔に微笑が浮かぶ。

一先ず四人は、播本さん宅に。播本さんは、ホストファミリーを快く引き受けて下さった、私の家とはすぐ近くの友人である。

病院の検査が続き、思いがけないはしかのハプニングもあって疲れていた一行にとって、ここの田園風景は救いであったようだ。ターニャさんは、車を降りると深く息を吸っている。ユーリャは開口一番、「それでわたし達はどこで暮らすの」。とにかく皆、休みたい様子だ。

気がつくと、首の正面、その他あちこちにばんそうこう

の様な貼薬を貼っている。府中の中学生達が中心になって松笠や松やに等を集め、大勢で手作りしたと聞いている、広島の十河先生処方による甲状腺異常の治療薬だ。

不特定の極めて多数の患者に対して、副作用もなく、数多くの検査のデータを待たず治療にかかれる方法として、東洋医学は有効だ。高価な医療機器がなくとも、貼薬を送ればよい。ツボさえ体得すれば、自分でも貼ることができる。今回の広島滞在では、その効果を試験的に試みている。

ターニャさんとジェーニャが、そのまま播本さん宅に宿泊。やがて東京から倉敷に到着した秋山さんを迎え入れ、オクサナ、ユーリャ、秋山さんは私の家に宿泊することにして、二組に別れる。

徳方さんが岡山から駆けつけて下さる。ボロージャと「ジュノーの会」の柳田さんのステイ先であった徳方さん宅には、二人とも来られなくなってしまったのだ。

とりあえず食事した。徳方さんが、じっくり焼きあげて来て下さった逸品の酵母パン――。これが、滞在の期間中、おいしくて力のつく主食となった。

オクサナとユーリャは一通り食べると、

「ありがとう！」

とそろって日本語で言って席を立ち、二人の部屋にこもって戸を閉めきってしまった。よほど疲れているのだろうと察せられ、そのまま、そっとしておく。

四十分程した頃、二人は少し落ち着いた様子で部屋から出てきて、散歩したいと言う。ターニャさんと播本さんご家族も誘い、夜の散歩。帰ってくると、わが家の末娘で十三歳の寿々と、すっかりうちとけていた。片ことの英語が通じたと、オクサナと話し笑い合っている。オ

カット・播本　亜紀

クサナが小学校から英語を習っていたことが分かり、何とか共通語の手がかりができた。

ひんやりした夜の空気が、疲れた旅人の何よりの癒しになった。豊かな自然に恵まれたウクライナの人々はもともと非常に散歩好きであった。……しかし、今では、子ども達が外で遊ばないように、学校の下校時間を遅らせたりしているのだ。

四月十五日　（水）

はや五月晴れ、朝の陽光はあふれるばかり。

ユーリャもオクサナも秋山さんも、深く眠っている様子。九時、ターニャさんより「起こして下さい」と電話がはいる。

洗顔をすませると、オクサナの長い金髪をユーリャが編んであげている。二人は、ウクライナ出発の前日に初めて知り会ってまだ十日というのに、何年来の親友であるかの様に息があって、何か話してはくっくっと笑う。

十時半、播本家より一行、岡山から徳方さんと全員揃う。こんなに晴れ上がった空の下、先ずは鷲羽山展望台より瀬戸内海を見渡そうと鷲羽山へ向かう。検査もない、病院へも行かない、さあ今日は海風にあたって、思いきり翼を広げようね。ジェーニャが笑っている。

途中小休止して、絶景の海を眺める。さらに上へ。ハイランドの前を通る。車の中の秋山さん、オクサナ、ユーリャの眼は、スピードのある遊具の動きに釘づけだ。

車を止め、相談する。ここでもし調子が悪くなってもこんな山の上に救急車はすぐ来てくれないし、病院も遠い。しかも天気予報では、大雨になるという。

私達ホストマザー三人は、三人の子ども達の体を心配して、ハイランドに入場することを迷っている。

「ストレスが吹っとびますよ。大丈夫ですよ！」

最積極派は秋山さん。オクサナ、ユーリャは口にこそ出さないが、気持ちははるかに飛んでいる。車酔いしていたジェーニャも「はいりたい」と口を揃える。ターニャさんと話し合い、とにかく中にはいりましょうと決める。徳方さんの仕事先・自然食レストラン「たきざわ」

のご好意で、入場料もカンパしていただいている。
メリーゴーラウンド、長い長い綱のブランコ、廻る廻る、皆が手をふる。笑顔が廻る。ジェーニャが、もう一度乗ろう、一緒に乗ろうよ、と言うように播本さんの腕にぶら下がっている。馬車を模した回転木馬に乗って、ターニャさんは貴婦人の様に優雅だ。ジェットコースターも軽くこなす。それから、最難関に見えた直降下するウルトラツイスター。年長の二人が「こわかった……」と、あどけない子どもの顔で降りてくる。こんな時、日本語もロシア語もない。問題の立ち乗りジェットコースターはオクサナと秋山君が挑戦。ふらふらと降りてくる。その眼が笑っている。
バーリャとボロージャもいたら、一緒に遊べたら、どんなに楽しかったろう！　病室の二人が浮かび、私達は何度もそれを口にしてしまう。
ドーム型のおみやげ店にはいる。ジェーニャは見つけるのが速い。そして、す速く買う。十色ボールペンは、オクサナ達も真似して買った。トラかネコかのかわいいぬいぐるみを買うと、ふところに入れ、頬を押し当てて抱いている。三百五十円の指輪も迷わず買ってから、播本さんに見せている。
遅い昼食の後、再び入場して遊ぶ。ポツポツと雨が……。濡れて熱が出たら大変だ。
外に出ると、今度はイリュージョンツアーズというお化け屋敷のような建物にはいりたいと、秋山君と、ユーリャ、オクサナ、ジェーニャも今度は口を揃える。この際ということで、そこにも入場。八年生のユーリャもオクサナも小学生料金だ。奇妙な二十一世紀のお化けが次々現れる。なんともかわいいエンジェルがいる。ボタンを押すと、突然ガラス越しにオシッコを吹きかけてくる。皆、笑って笑って、それがおしまい。
「雨が降るから帰りましょう！」
と呼びかける播本さんにすかさず、
「ウクライナでは、雨もまた楽しみ。雨が降るから帰りましょうという、ここではお馴染みのことばを、ウクライナではあまり聞きません」

と、ターニャさんもはずんでいる。（でも今、ウクライナの雨に濡れたら……）と心をよぎる思いは、ことばにならない。

帰り、ジェーニャは車酔いでもどす。

たとえ重い病気であっても、子ども達はよく動きまわるし、大声で話し合ったり、遊んだりする。子どもはしばしば、自分の病気のことを忘れてしまう。あんなに元気に遊んでいたけれど、ジェーニャはやっぱり疲れやすいのだ。時おり、ベンチにふっと腰かけていたジェーニャの表情……。あんなに遊んでいた最中の昼食なのに、あまり食べなかった子ども達……。

ジェーニャの回復を待ち、七時半に全員一堂に会した。その間、ユーリャとオクサナは寿々に教えられてファミコンをたちまち体得。十分後には、もう熱中していた。未だに訳の分からない、その小さな機械のコスモポリタン・ミステリーに母親達はうなってしまう。

勤めや学校から帰った播本さんとわが家の家族も集まり、「リビング岡山」の鈴木さんも合流。十五人で、二日前に十一歳になったジェーニャの誕生日パーティーをしようということになった。

持ち寄ったご馳走が、テーブル一杯に並んだ。今日のために、大きなケーキを焼いて下さっていた播本さん。デコレーションしてくれた播本さんの由佳ちゃん、亜紀ちゃん。「ハッピーバースデー・ジェーニャ」の合唱。ジェーニャという呼びかけが四回。そのたびに、ジェーニャはうれしそうに、ククックッとターニャさんに笑いかける。笑顔が上気して輝いている。十一本の燭光を吹き消すジェーニャ。賑やかな夕食が始まる。ピロシキ、ビーフストロガノフ、きのこの温サラダ、徳方さんのおいしい、いり豆・ゆかり・ごま入り玄米おにぎりも、あっという間になくなった。子どもたちが喜んで食べている。

「ステンカラージン」「ともしび」「ウラルのぐみの木」など合唱。私達が「赤とんぼ」「野ばら」を唱う。ターニャさんが、「モスクワ郊外の夕べ」をリードして下さる。オクサナ、ユーリャ、ジェーニャが、ほのぼのとし

たウクライナ民謡を合唱してくれる。母と娘の交わす会話を歌にしたものという。「もう一曲」と、今夜はオクサナとユーリャの二人が、頬を染めながら楽しそうに唱ってくれた歌。ホ、ホ、ホ、とかけ合いがはいる。「腰がいたいから」「疲れたから」と働こうとしない妻を、人々が陽気に囃した歌という。

いつの間にか十時を過ぎている。「ダ・スヴィダーニャ」（おやすみなさい）と、覚えたてのあいさつでそれぞれ帰宅。

疲れすぎていないだろうか。熱を計るとユーリャが三十七度ある。「シャワーをやめなさい」というと、ユーリャはもうロシア語であることも忘れて、一生懸命何かいう。何となく意味が伝わる。ユーリャが三十七度あるのは日常らしい。

「今日は汗になったから、どうしてもシャワーは浴びたいの！」

そう言っているようだ。瞬間、ユーリャを抱きしめたいように可愛くなって、私はＯＫという。

▲　美観地区川畔にて

四月十六日　（木）

府中に向かう日である。皆、元気に起床。「ドーブロエ・ウートラ！」（おはよう）。今日もよく晴れている。気になっていた体温は、二人とも六度三分。ユーリャは、今朝もオクサナの髪を結っている。

十時、全員揃って、美観地区へ行く。倉敷川畔の柳がすっかり緑の色濃くなっている。アイビー・スクウェアの中庭の堀に泳ぐたくさんの鯉たちと、皆、ひとしきり遊ぶ。

おみやげ店が並んでいる。と、ジェーニャが小さな叫び声を上げる。お財布を車の中のバッグに入れたまま来てしまったという。あんなにおみやげを買うのが好きなジェーニャなのに、次にはすっきりとあきらめていた。お金を貸して欲しいとも言わない賢いジェーニャのことを、ウクライナのお母さんに報告してあげたいと思った。

民芸館に入場する。ターニャさんはさすがに詳しく、民具のろうそく立てのことなど私達に説明して下さる。織り物も、染色も、民衆の必要から生まれ、それ故美しい作品の数々を、ターニャさんはよくよく見ている。

郷土玩具館は時間がないので、ターニャさんだけ入場。もう出発の時間が迫っている。すぐ駅へ直行。

水筒がなくて飲めなかったジェーニャの食間のお薬を飲むため、駅構内のレストランで白湯を一杯いただく。レストランの壁に向かい、何回目かのかけ声の後、一気に粉薬を飲み込んだジェーニャ。飲みよい時間の飲みよい薬にならないものかしらと、今後長期療養になるジェーニャの身が案じられる。貼薬もはがれやすく、かゆそうだ。成長してゆく子ども達。何十万人ものジェーニャやユーリャやオクサナ。人がした過ちのためにその成長を妨げることが許されてはならない。過ちのせめてもの償いとなる治療も、子ども達の負担にならない様に改良されていって欲しい——。

十三時二十七分、電車がはいってきた。私達は思わず肩をしっかりと抱き合っていた。ユーリャと、オクサナ

と、ジェーニャと。オクサナが、寄せ合った頬の耳もとで、「I like you !」とささやくのが聞こえた。ありがとう、オクサナ。あなたの英語にどんなに助けられたことか……。

乗りこんでゆくターニャさん、秋山さん、子ども達。閉じたドアの向こうで、オクサナがかわいい上手な投げキッスを送ってくれている。電車が走りだした。昼の別れは、光がまぶしい。

「チェルノブイリ」はこれから

一行がウクライナに帰国して四か月後、子ども達がすっかり馴染んだ府中第一中学と、オクサナやジェーニャの通うミハイル・コツビンスキー中央学校が姉妹校の縁組をすることになった。その式に出席した府中一中の先生と「ジュノーの会」のメンバーが、広島を訪問した子ども達のその後の様子をビデオに撮ってこられた。皆、ひとまわり成長した感じで、家族に囲まれて、笑っている。

しかし、事態はますます深刻だ。小学校の先生でもあるジェーニャのお母さんが言っている。

「子ども達は二つ三つの病気を持っています。授業の時足が痛い、鼻血が出る、……どうしたらいいか分からない。助けて下さい！」

また、現地の医師の話の中に、一九八八年以降に生まれた子ども達が、とくに免疫力が低く、体が弱いという。

そんな状況の中で、試みられた貼薬は、甲状腺障害の比較的軽い症状に対して予想以上の効き目があると分かり、転地療養以外に具体的な治療の方法もなかったチェルノブイリの人々は、貼薬に一条の期待を寄せているという。

オクサナが達筆なロシア文字の手紙と一緒に、まるでかわいいシャーマンが宿ってでもいそうな、木製の人形、マトリョーシカをことづけてくれた。

「チェルノブイリ」はこれからだ。しかし、聞き及ぶ苦境の中にあっても、オクサナの手紙はさっぱりと明るい。

（倉敷市在住・聖華看護専門学校講師）